

【特別寄稿】

ジャーナリスト・駱文森の個人史からみた
台湾・日本統治時代から民主化時代への軌跡（上）

駱 文森（語し手）

LUO, Wensen

羽生浩一（聞き手）

HANYU, Koichi

キーワード：台湾史；駱文森；ジャーナリズム；朝日新聞；オーラルヒストリー

Received: 2017.1.28

はじめに

台湾人・^{ローウェンセン}駱文森（1932－2016）は、戦後の日本メディアの台湾（中華民国）報道を支えた稀有なジャーナリストであった。台湾の日本統治時代（1895－1945）下に日本語で初等教育を全うした最後の世代の一人であり、そのことが戦後の国民党政府による戒厳令下の言論統制の時代を過ごした青年期と後の職業選択に多大な影響を及ぼした。駱氏は、1970年代初頭の日中国交正常化にともない日本のメディアが台湾にある取材拠点を閉鎖し日本人記者が撤退するなかで、日本の朝日新聞社から特命を受けた唯一の通信員として、国民党政府当局の監視下に置かれながらも、国際的に孤立した当時の台湾の情報を日本語で配信し続けた。駱氏のジャーナリストを志すまでの思想形成と生活経験の変遷、ならびにジャーナリストとして海外メディアの通信員として活躍した個人史を、台湾の近現代史の言論史の文脈のなかに位置づけて記述することは、オーラルヒストリーや歴史証言記録、ジャーナリズム研究の一環として学術的な意義がある。

駱文森氏のオーラルヒストリー研究としては、本稿の執筆を進めていた時期に発表されたもの¹⁾が存在するが、本稿はそれに依拠せず、駱氏から生前許可を得たうえで、未完・未発表の自伝手稿（原稿用紙手書き 287 枚）²⁾を一次史料とし、その内容の確認を目的に実施した対面インタビュー（2015 年 8 月～2016 年 3 月の期間中に 8 回実施）を踏まえ、編んだものである。オーラルヒストリー採取では、質問に対する回答において、その場で語られる記憶の鮮明さや、質問の流れに左右されることがあるが、本稿は、客観的事実に則して、主観的記憶を時系列にまとめた手稿を一次史料としているため、既出の研究成果と内容的に補完し合うものとなり、より詳細な歴史証言記録となるであろう。文中の（ ）の両括弧内は駱氏による、〔 〕の両括弧で括った箇所は本稿執筆者による付記である。本稿のテーマから外れると判断した内容については、紙幅の都合上〔中略〕とした。なお、本稿で

は、1970 年 7 月の朝日新聞通信員採用時までを前半（上）として掲載する。

1. 日本統治時代と第二次世界大戦

1.1. 三つの名前

私は戸籍で三つの名前を登録しています。

- ① ^{ローウェンセン} 羅文森 （1932－1943 年）
- ② 内田森夫 （1944－1945 年）
- ③ 羅文森 （1946－1964 年）
- ④ 駱文森 （1964－現在）³⁾

1932 年（昭和 7 年）8 月 12 日、私は長男として基隆（キールン、*Keelung*）で生を享けました。父母は私が健やかに生きているのを確認して 8 月 22 日（十日遅れ）に出生届を提出しました。当時、台湾では幼児の死亡率がまだ高く、遅れて戸籍登録をすませるのが一般的でした。

1893 年頃、祖父・^{ローシェンロン}駱顕隆（俗名：^{アホウ}阿火）が清国福建省惠安縣（アモイの近く）から新天地を求めて台湾に移住、基隆港に定住、翌年の 1894 年、清国と日本が開戦（日清戦争）、その翌年、清国が敗れて台湾を日本に割譲、日本が台湾を占領（1895 年 6 月 17 日、台湾領有、始政日）、住民に日本籍か清国籍かを選択させました。2 年間の猶予をあたえ、一部の人は清国へ戻りましたが、祖父は台湾にとどまり日本人になることを選びました。祖父は本来、駱の姓でしたが戸籍登録の際、「羅」氏にされました。これは「駱」と「羅」は福建や台湾での発音がほぼ同じの「ロー」でしたので、間違えられて登録されたのでした。

1964 年まで、全家族が羅氏を誤用していましたが、その年、三代目の私は既に結婚して子供がそろそろ小学校に入学する時期を迎えますので、当時の台湾政府内政部長（大臣）に訴えて「駱」氏の復帰が認められ、全家族の戸籍登録「更姓」となり、私も羅文森から「駱文森」となり「らく」になりました。

「内田」森夫とは、日中戦争中、台湾総督が皇民化運動を進め、日本の天皇も台湾人を日本人として「一視同仁」台湾人の改姓名の結果で、羅文森から「内田森夫」に変わったのです。では、何故「内田姓」にしたのか、それは私の祖先は支那の周王朝時代（約 2600 年前）の貴族でした。

^{ジャンズヤ}姜子牙といわれる宰相クラスの貴族で七人の子があり、その中の一人が「駱」という地に任命され、当地の「駱」をとったのが「駱」氏の始まりだそうです。駱氏の出身地は、中原（支那大陸の中心地）の河南省「内黄」縣といわれ、「内黄」が駱氏の燈号（家号、家紋）となっています。

日中戦争中、改姓名の際に父^{ロージンション}「羅金生」は、祖先の出身地家号「内黄」の「内田」をとって日本人の「内田」を名乗ったのです。当時、父は日本郵船株式会社の基隆支店に勤めていたので改姓名を迫られたのです。私は内田森夫となり、小学校の卒業証書、中学入学の記録（1945.4）も内田森夫となっていました。

ところが、1945 年 8 月、日本は敗戦、私達台湾人は戦後マッカーサー元帥（連合国軍総司令部）の命令で台湾を接収（占領）しにきた国民政府軍の命令で「中国人」に戻され、「内田森夫」は「羅文森」に復帰しました。このようにして、私は天地がひっくり返ったのでした。1945 年 8 月の「国籍」「氏名」の改ざん劇は、私にとって大きな衝撃となりました。言葉も台湾語（家庭で）、日本語（学校で）から、北京語を余儀なく習わされました。

1.2. 戦時中の記憶

私の最初の記憶が残るのは、①1935 年春頃、②1935 年秋頃の出来事でした。

- ① 1935 年春、母方の祖父が亡くなり、親族が集まって葬儀が行われ、沢山の人が泣いたり、又、夜は暗い中（当時、母の実家、貢寮の旧社という所は、まだ電灯がありません）、銅鑼や笛のような楽器の音が聞こえたりしたのを覚えています。
- ② 1935 年秋、日本が台湾を統治して 40 周年になり、台湾博覧会が開かれ、私は父母に連れられて台北の会場を見物しました。私の記憶は室内の大水槽の中で、女の人（海女）が泳いでいたのを今でも鮮明に覚えています。

漢口陥落（1938 年 10 月 26 日）を祝って日本各地で提灯行列がありましたため、私が住んでいた基隆市も勿論盛大にやりました。当時、私は 6 才になり小学校の入学前でした。1938 年（昭和 13 年）10 月 27 日付の朝日新聞号外によると、「大本営陸海軍部 27 日午後 6 時 30 分公表：我が軍は本 27 日午後 5 時 30 分陸海協力残敵を掃蕩し、武漢三鎮を完全に攻略せり」と武漢完全占領を報道しました。11 月 1 日夕方から、基隆市内で提灯行列の大行進、私は母に連れられて、その提灯行列を見物に行きました。街中行列と大観衆で、私は母達とはぐれてしまい迷子になりました。私は一人で約 1 km 離れた自宅へ小雨の中を走って帰りました。母と姑母（父の姉）等、大人達は必死に私を探そうとしましたが見つからず、交番にも届けても駄目でした。夜中になって、あきらめて家に帰ったら、私は既にぐっすり眠っていたそうです。この迷子事件は鮮明に記憶に残っています。大人達は私が迷子になって冷静に行動して、自宅までよく一人で戻って来たと何時もほめていました。

私が生まれたのは 1932 年（昭和 7 年）で昭和の激動の時期でした。1930 年、台湾では原住民（高砂族）が台湾中部の高山地で霧社事件を引き起こし、日本軍の大弾圧（ガスや飛行機まで出動）に遭いました。1931 年の満州事変（中国東北）、1932 年の満州国成立、1937 年の日中戦争勃発、1945 年の敗戦に至るまで、いわゆる少年期を過ごして来ました。

この昭和の激動期は、私の性格や時局の変化への関心、更には、愛国心を培った原動力になったと思います。〔中略〕

1939 年 4 月、私は基隆市の滝川公学校（台湾の子弟が勉強する学校、日本人の子は小学校）に入学。入学の日、早速日本語力のテストがあり、私は 20 題を全て正解、基本的な日本語が分ることでした。本来、家では台湾語をしゃべっていましたが、時々、父母や近所の人達が日本語をしゃべっているのを聞いて覚えたのでしょう。

公学校は 1941 年（昭和 16 年）の真珠湾攻撃を前に、日本は公学校、小学校を全て国民学校に改名しました。しかし、第一種（日本人）、第二種（台湾人）、第三種（高砂族等いわゆる蕃人）の区別がありました。

私は1年生に入学[した時]から大変読書が好きでした。頭は賢く(?)、成績は抜群(?)、よく副級長に任じられ(級長は公務員の子)、全市の教師師範教学の際には、担任先生に指名されて「教育勅語」暗誦を披露しました。全基隆市の2年生担当の教師達が見学する前で堂々とやって、先生からほめられました。[中略]

1.3. 滝川小学校時代

父は日本統治の下で、小学校(台湾子弟の公学校)でいい成績を上げました。日本人の先生も父の勉強ぶりをほめましたが、祖父の反対で中学には進学出来ませんでした。祖父としては働き手が欲しかったのでしょう。父は中学校には行けませんでした。通信教育で勉強して日本郵船台北支店に入社することが出来ました。父が順調に上級の学校に行けなかったのも、子供達の教育には深く関心を配り、その結果、私達7人(5男2女)は全て良い教育を受けることが出来ました。

私は小学校在学中、修身で1年の1、2学期で‘乙’となったこと以外は全ての科目、品行等、全て甲(1~2学年)優(3~6学年)で通しました(国民学校制への移行で、学業評価を甲乙丙丁から優良可へ)。私は勉強が大好きで、課外での読書をよく楽しんでいました。私の読書習慣は3年生の頃からだと憶えています。私の叔母は時々「少年クラブ」(漫画本)等を買って下さり、益々、勉強、読書が好きになりました。学校が好きになり、先生達を尊敬してよく勉強した結果、一般の台湾人児童の中学進学は難しいのですが、私は小学校を卒業してクラスで唯一人中学校に進むことが出来ました。

中学校に進学するには、学力の強化、体力の強化が必要でした。又、当時(1940年代)は台湾では日本人と台湾人の間には差別があり、台湾人の児童はなかなか上の学校には入れません。父は私の中学への進学を強く激励してくれました。5年生になると先生も進学希望者を集めて放課後に補習(学業強化)指導をして下さいました。

父は又、日本人小学生が勉強する教科書(台湾児童が勉強する公学校教科書とは一段レベルが違うようでした)を買って来て私に読ませました。

1944年に私は6年生になり、受験勉強もより強化しました。その年の秋になって、米軍の空襲が激しくなったので、基隆市の全体の受験希望者を集めて、田舎に集団で疎開学園を開設して勉強することになって、父も私を台北の近郊(土城国民学校)を使って設置した疎開学園に送りました。

1945年(昭和20年)3月に基隆中学校の入学試験があり、前日までよく勉強しました。

この集団疎開学園での集団生活や毎日の時局の変化について強い関心を余儀なくされた経験は、私の一生に大きな影響を与えてくれました。その期間中は、日本の戦局が一日一日と不利になり、毎日のように講堂に貼りだされた戦果の大本営発表のニュースを私は必ず目を通していました。当時、ヨーロッパではドイツがロンドンにV1、V2ロケットを打ちこみ、私達を驚かせていました。太平洋戦争でも日本が毎日のように空撃を受けていました。このような激動の時期に、私は父母と離れて疎開学園で勉強しました。毎日、時局の変化を見つめていました。この時の経験が私をして、毎日、新聞、TVを通して生活する習慣が身についたのです。これが又、私の歴史に対する興味、社会生活や政治常識を重視す

ることになっているのです。

1.4. 戦争末期の中学校入学

1945年3月の入学試験は、空襲中に行われました。当局は空襲が頻繁にあるので3月初め頃から、全ての入学試験は口頭試験と体力検定だけと決めており、学業成績の査定は、国民学校の内申書に依りました。入学試験当日、私は基隆中学校試験官による短期間の口頭試験を受けました。その中で、私の胸元に貼っていた名符の規格を聞かれ、面積を問われて、私は「縦5cm×横8cm」=40平方cmと咄嗟に答えました。これは算術と機転の早さを示したものでした。体力検定では、トラックで一周約200mと懸垂3回（小学校時代には12回やれましたが、疎開学園でマラリアに罹り体力が弱くなっていました）、指先の動き等、共に順調に合格となり、見事、基隆中学校に入学出来ました。

私は1945年4月に入学しましたが、8月15日の終戦まで戦時中で毎日のように奉仕作業があり、教室での授業はあんまり記憶していません。私は日本統治時代の基隆中学校の最後の入学生でした。19回生の私は今年（2012年）で80才を越え、先輩たちも老いており、私達基隆中学校同窓会（台湾・堵南会）（日本・堵陵会）は、11月3日に最後の幹事会を開会して幕を閉じました。同窓会総会は2011年11月3日に閉会しました。

空襲が日増しに激しくなったので、父と私だけが基隆市内に残り、母と弟妹達は田舎の親戚の家に疎開しました。私は父に連れられて、時々、警防団（戦時中、基隆市内の治安や見廻りをして防諜、防犯の作業をする民間団体）の集会宿舎に泊まることもありました。

戦時中の基隆中学時代の父との二人だけの生活は、私に独立した生活が出来る試練の時期でもありました。自炊、洗濯、いろいろな家事もやりました。父も警防団や、日本郵船（近海郵船）の仕事でいつも忙しく、時々一人で孤立したこともありました。

週末には、私も時々田舎の母と弟妹達に合流することもありました。ある日、田舎の山の上から基隆市の上空を眺めていると、米軍の飛行機が飛んで爆弾を投下するところを目撃しました。爆弾は飛行機から落とされて、斜めに一つぶ、一つぶと小さく見えて、基隆市の方向に落ちて行くのが見えました。まもなく基隆から煙がふき上がるのが見え、基隆市が被害を受けた様子でした。4月から6月にかけて米軍の沖縄攻撃、占領があり、基隆も相当激しい爆撃を受けました。私も基隆市内滞在中、空襲に遭い、防空トンネルに逃げ込み、自宅の付近が直撃弾を受けた時は、猛烈な爆発音ガァーン・ガァーンと聞こえてくるやら、爆弾炸裂の轟音は人々を恐怖のドンゾコに追いやりました。

8月15日、遂に日本は敗戦。その日は玉音放送があるので、私は警防団の近くの派出所で聞きました。ラジオ放送は雑音がありましたが、天皇陛下の玉音が聞こえました。内容は、はっきり覚えていませんが、当時何だか日本が敗けたような感じでしたが、私は日本が敗戦することは一度も考えたことがなく、頭が混乱しました。一体これからどうなるのか、この時私は13才になったばかりの中学生1年生でしたので、何事も判断出来ず、戦後の大変動期を迎えることになります。

2. 終戦と中高時代

2.1. 基隆中学校時代

中学 1 年生だった私は時局の大変化、天下がひっくり返ったと思うようになったのは、夏休みが終わってからのことでした。

9 月になって新学期が始まりましたが、学校は正常に戻りませんでした。校舎は兵隊さんが駐屯しており、学業は市内の公学校（私の公学校、滝川国民学校）を借りて、臨時授業が行われました。英語、国語などが約 1 ヶ月間続けられました。日本人の先生達がまだ教職についていました。しかし、戦後間もなく、市内で極少数の台湾人が、日本時代に刑事や警察官をしていた人を見つけて、殴るなどして報復を加えました。学校でも、少数ながら台湾人学生が日本人上級生への仕返し（戦時中は上級生が下級生の制裁と称して暴行を加えるのは当たり前のことでした）があり、日本人学生の登校が徐々に減って行きました。

台湾は日本の敗戦で、中国〔蒋介石^{ジャンジェシー}の国民党政府〕に渡されることになり、日本を占領した連合軍総司令官マッカーサーの命令第一号で、中国の軍隊が台湾を占領し、在日日本軍の降伏を受けました。

10 月中旬、基隆港に占領軍がアメリカの軍艦で上陸、私達基隆中学校の学生は動員されて埠頭に出迎え、基隆駅から台北に向かうのを見送りました。私もその一員として中国からの軍隊と行政役員達の送迎に出ました。当時、私達は日本人の統治から中国軍の占領に会い、中国人になることを強要されました。1895 年、日清戦争終結によって下関条約が結ばれ、台湾が日本の手に渡った時、日本の総督は 2 年間の猶予をもって台湾人に国籍を選択させましたが、1945 年 11 月、中国軍は突然、台湾住民が中国に国籍変更になったと一方的に発表しました。国際法によれば占領軍はそんな権力はありません。国際法違反です。

しかし、当時の台湾人は「祖国」に復帰したと勘違い、抵抗も抗議もありませんでした。大部分の人達は国府軍（国民党政府軍）を喜んで迎えたのでした。軍隊が軍艦から基隆港に降り立つと、天秤棒で荷物（鍋や、カラ傘等）を運び、服装は大変貧弱でした。日本軍の凛々しい姿に比べて「祖国の軍」は台湾人を失望させました。あーあ、これが支那兵だと悟りました。日本時代に教えられた「支那兵・敗残兵」の記憶が甦ったのでした。

間もなく（1～12 月頃）国府軍から派遣されてきた先生達で学校での授業が始まり、私達は日本語ではなく、北京語での学校生活に入りました。ですが、先生達の発音はまちまちで、ちんぷんかんぷん。翌年（1946 年）秋になって学制が変わり、9 月から新学年になり、私達は中学から、初中部（中学校）2 年生に編入されて、本格的な中国の教訓制度で学ぶことになりました。1945 年 12 月～1946 年の 7 月まで、日本語、北京語のチャンポンで北京語を覚えてゆきました。又、この期間、歌を教えられ最初に歌ったのが「三民主義の国歌」と「義勇軍行進曲」でした。三民主義の国歌は今でも歌われ、義勇軍行進曲は 1949 年 10 月 1 日、中華人民共和国の国歌となっています。

1946 年 9 月、新学期になって校長が替わりました。鐘浩東^{ジョンハオドン}校長は台湾南部の出身で、高等学校（台湾人エリート学生が勉強する最高学府）、明治大学中退を経て上海経由で中国南

部の国民党支配地域に渡り、戦後、中国から帰台して校長になったのです。高等学校の学生時代から、民主主義、社会主義を理解していた進歩的な人物でした。鐘校長は積極的に学校の経営に当たり、優秀な青年、学識者を先生に招聘し、学生の指導に当たりました。学生には自治会を作り、学生達に民主主義を教えました。

鐘校長は1949年秋、当時白色テロで台湾を占領統治していた国民党当局に、共産党幹部として捕われ、1950年秋に銃殺されました。（私は基隆中学校の台湾人同窓会「堵南会報」で、「校長の銃殺」を書いています）

私は中学校在学中の2、3年生の時期は、この鐘校長の率いる先生達の指導を受けました。私の民主主義、社会主義思想の啓蒙時代と言えるかも知れません。この影響は後の台北師範（1948～1951年）時代から、文化大学新聞学科、同大学日本研究所（大学院修士課程）等の学業にも大きく影響することになります。

基隆中学校（戦後は台湾省立基隆中学校と名称を変更）初中部（中学校3年制）在学中、学業成績は相変わらず抜群でした。中国文（中国語）は最初、健康を害して休んだため出遅れましたが、3年で卒業する頃には皆と一緒に並ぶことが出来ました。とりわけ、歴史、地理の科目では暗記の必要があり、よく勉強してしましたので成績はいつも上出来でした。ただ、当時の国民党占領下の教育は中国の歴史と地理の教育に集中しており、台湾の歴史、地理は置き去りにされていました。（台湾の歴史、地理の教育は台湾人の^{リー・デン・フイ}李登輝総統時代〔1988～2000年〕になって初めて強化されます）

私と中学の同窓生達はよく一緒に勉強しました。時々、私の家（父の就職先の宿舍）に来て勉強することもありました。友達が十数人一緒に勉強する夜は、母も楽しく食事を作って皆と一緒に迎えてくれました。1948年6月の卒業試験の前から数日間、私の家で勉強して、皆よい成績を取れたようでした。私の卒業の総合成績は4番でした。2番、3番の二人は、後に鐘校長と一緒に逮捕された優秀な生徒でした。この4番までの四人は鐘校長から自筆の奨状〔賞状〕が手渡され、名誉なことでした。

2.2. 台北師範学校時代

父は祖父に反対されて公立中学校に進学出来なかった経験からか、私の中学進学には大きな関心がありました。中学の2年頃から、次の段階の高校進学についても気を遣っていました。父は私に工科か商科の高校に入り、実業学校を出で職に就くように言っていました。父がよく台湾を留守にしたり、失業したりしていた頃なので、私は長男として早く仕事を求めて、少しでも家計を助けたいと思っていました。しかし、父はどうしても高校や実業学校に進むよう励ましてくれたので、私は公費の師範学校に進学を決めました。3年の師範学校は公費で、学寮生活とあって父のお金を使わずにすんだばかりか、師範学校を卒業して、すぐ基隆の小学校に就職して教師となり、わずかながら父の生活費の足しにすることが出来ました。

師範学校に私は免試験〔試験免除〕の推薦入学、クラスメートからもう一人〔^{ベン・ミン・ラン}潘銘讓〕が試験に合格し、基隆中学校からあわせて二人、台北師範学校に入学することになりました。私達二人は、師範2年（高校2年）時に、彼が班長（級長）、私は学術班長（学芸部長）

として、クラスの模範生でした。基隆中学での基礎が良く出来ているので、国語文、英語は勿論、数学、音楽（楽理）、教育心理学等の課程も成績は抜群でした。

2.3. 白色テロと戒厳令下の処罰

私達が入学したのは1948年の9月、中国大陆で内戦が激化していたころでした。1949年1月には国府（中国国民党政府）総統（1948年5月就任）の蒋介石が下野、中共（中国共産党）軍は北京を占領、益々、国民党側が敗退していました。1949年4月、南京陥落、台湾では戒厳令が發布されて、赤狩りが始まります。いわゆる「白色テロ」の時代に入ります。私達基隆中学卒業生の二人は、鐘校長の逮捕（1949年9月）に次いで、1950年秋、鐘校長の処刑（銃殺刑）を受けて、二人共々「無名」の処罰を受けました。班長だった潘銘讓は退学処分、私は「留校察看」（退学ではなく、学校に留まって謹慎監察）となってしまいました。

1950年6月末（2年生の学期末）、学校側から届いた成績表（通信簿）の操行（品行）欄には「不合格」となっており、評語では「該生本学期操行不及格、照章應予退學、嗣經校務會議議決、姑准留校察看」（意識：当学生は本学期操行不合格につき、学校の規則によって退学にすべきところ、校務會議の決議に依り、留校察看とする）。全く青天の霹靂でした。父は私を理解していました。1949年9月、鐘校長のクラスメート4人が逮捕された時、父は私の本棚にあった本をすべて焼いてしまいました。当時、私はまだ師範2年生の第一学期でした。私は逮捕されたクラスメートともよく逢っていました。父は私の友達が逮捕されたのでビックリして、社会主義関連の書物等を処分したようです。

事実、私達は時局の変化を毎日心配していました。一体、国家はどうなるのか、台湾はどうなるのか、われわれ青年達は日本の幕末の志士達のように集っては、時局について語り合いました。自然と愛国心が募り、「読書会」と名はつかないものの、よく論議しました。私は師範では学寮生活でした。時々、休日には基隆に帰っては、基中の学友と逢っていたわけです。台北の学寮でも、学生達の仲間で議論することもありました。

当時、学校のR先生が毎晩教室で時局の解説をしていました。国共内戦の行方まで話していました。このR先生は蒋介石が1949年末、台北に本拠地を固めた頃、突然いなくなり、中国大陆に逃げ帰ったようでした。このようにして、国共内戦、時局の変化（1950年3月、蒋介石は総統に復帰）は激しくなっていくります。

1949年3月29日夜、台北の台湾大学キャンパス内で青年集会がありました。北京でアメリカ兵が女子大学生を強姦した事件に抗議、呼応した青年達の国府に対する大きなデモ、集会でした。当時、台北を中心に大学生、高校生等が国府軍に対する抗議デモを強めておりました。私もこの3月29日の焚火を囲んで、義勇軍行進曲等、革命まがいの歌を唄い踊り、青年達の時局に対する憂いを訴えていました。今から思い出しますと、これは、青年達の中に中国共産党に同情、賛成する人達がいて、国民党打倒を唱える行動のようでした。さながら革命前夜の様相でした。

因みにこの日、台湾大学で中共系全学連「台北市大中学学生聯合会」成立大会が行われました。4月6日になって、当時台湾警備司令長官であった陳誠^{チェンチヤン}（後に蒋介石総統の下で

副総統となる）が、学生運動の中心だった台湾師範学院を急襲、学生運動家を逮捕、同時に、台湾大学の学生も多数逮捕され、処刑された者もありました。いわゆる「四六事件」と称され、台湾内での国共内戦を国民党が制圧したわけで、国民党は 1949 年 5 月 19 日台湾省に戒厳令を發布、台湾は蒋介石の渡台を待たずに反共の砦となりました。この戒厳令は、1987 年 7 月 15 日に（国民党の党外勢力と言われていた）反国民党の群衆の抗議で、ようやく解除されるまで、世界一、最も長い 38 年間続きました。

こんな時局の激動の中で、国共内戦で敗れた国民政府（国民党）は南京から広州へ、又重慶へと逃げ、蒋介石が下野した後に代理総統になった李宗仁（副総統から昇格就任）はアメリカへ亡命、蒋介石は国民党の総裁として国事に当たっていました。

1949 年 10 月 1 日に中国共産党は、北京天安門広場で中華人民共和国の成立を宣言（中華民国は亡国として）、国旗、国歌が変りました。12 月 8 日、国府行政院が緊急会議で台北遷都を決議した後、蒋介石は 12 月 10 日、重慶から台北に飛来し、国民党総裁として指導に当たり、翌年 1950 年 3 月 1 日、台北で総統復職を宣言しました。蒋介石は 1975 年 4 月 5 日の死去まで総統職を一人占めしていました。因みに、蒋介石復職前日（1950 年 2 月 28 日）に日本の東京では「台湾民主独立党」が結成され、228 事件で日本に亡命していた廖文毅（リョウブンイ）が主席に当選。廖文毅は後に「台湾共和国」臨時政府（1956 年 2 月 28 日）大統領と称して、東京で台湾独立運動を推進していましたが、1965 年 5 月 14 日に単独で東京から台北に戻り、国府に投降、帰順してしまいました。このように 1950 年を境にして、国民党の独裁政治は益々、強まって行きます。

そんな中で、台北師範で勉強していた私は、第 2 学期（台湾は 2 学期制）を終えて、学期末試験を受けて真最中、‘第三次世界大戦’が始まったとの報が入りました。6 月 25 日、北朝鮮が 38 度線を越え、南朝鮮に侵攻を開始したのです。朝鮮戦争の勃発です。

朝鮮戦争の突然の動きに、国共内戦で国府を突き離していたアメリカは、第 7 艦隊を台湾海峡に派遣して、中共軍の台湾侵攻を阻止しました。アメリカの援助を受けた蒋介石政府は、これで安定に向い、台湾国内での独裁政治を強めて行きました。自信がついた蒋介石政府は、台湾における政治犯の処刑を進めて行きます。

1949 年から 1950 年にかけて、時局は大混乱、国民党軍が大陸の国共内戦に敗れて、第二次世界大戦の戦後 4 年を経て、大陸が完全に中共の手に入り、国民党は台湾に敗退して来ました。戦後の 4 年間、台湾を占領（国連軍を代表して）統治した国民党の軍紀は乱れ、汚職、腐敗、又、民生物資（米、砂糖、石炭）を大陸に運んで内戦を応援、物価は急激に暴騰（因みに 1945 年 8 月敗戦時に比べて、1949 年夏には 4000 倍にはね上がり、同年〔8 月？〕15 日をもって、旧台湾元は 4 万元で、新台幣元 1 元に替えられました）。こんな激動の時期に国民党は台湾人を抑えこんで、2.28 事件（1947 年）、白色テロ（1949 年春以降）を引き起こしました。

1949 年、私が台北師範 1 年生第 2 学期を迎えたころ、台湾は春から一斉に赤狩りを始めました。政府は一方では反攻大陸策を唱えました。

1950 年、2 年生第 2 学期に、台北師範では全校の作文コンテストを行い、各班（各学級）代表二人が参加しました。全校で約 30 人は一堂に集まり、黒板に書かれた題目に基づいて

作文を書きました。私もクラスの代表として参加。作文の題目は「反攻大陸」。平時の時局に対する関心と常識で、私は見事一位優勝を掴み表彰されて、全校生大集会の場で壇上に上り、校長先生から表彰状を受け取りました。

しかし一方では、私達は音楽の楽理等で音楽の先生に反発していたので、学期末試験をボイコットしたこともありました。基隆中学から行った私達二人は、級長と学術班長をしていて成績は良く、楽理等の課目にもついて行けましたが、多くのクラスメートは興味がなかったので、試験のボイコットを呼びかけてきました。私達二人も答案用紙を空白のまま提出してしまいました。当時は時局の困難な時期でもあり、政府や保安司令部（赤狩り機関）等は学生の動きにも注目していたので、「基隆中学事件」（鐘校長逮捕）に関連して私達二人は処分されたのです。

私は「留校察看」（謹慎監察）のまま3年生に上がりましたが、学友達は私を級長に推しました。学校当局は一時賛同しませんでした。が、学生自治ということで承認、台北師範での最後の1年は級長として務め、卒業前での実習は、私は附属小学校の教務主任（教頭役）を担当しました。普通の教学科目ではなく、卒業後のいろいろな職に役立つことが出来たのは幸いでした。

3. 夜間大学進学と朝日新聞との出会い

しかし、私の知識欲は益々募ります。〔師範卒業後の〕小学校教師、台陽鋳業を通じて、私は自発的に、いろいろな講習を受け、学歴ではなく学力が増強されました。1957年、私は教職を辞めて、台陽鋳業に入社、炭鋳勤務になりました。勤務先は山の中で（台北から汽車で約2時間、今では立派な自動車道路が出来て、約1時間で行けます）社員寮の生活でした。1965年1月、母が突然、胸益血で倒れ54才の若さで逝去しました。父が大変悲しんで毎日のように号泣し、私は父のいる実家で暮らしたいと会社をお願いして、1965年3月から台北の本社転勤となりました。本社は台北の中心地にあり、私は基隆から勤務することになりました。私は上司の特別の抜擢で常務取締役が兼務する人事室の人事管理師として、社長や高層幹部の直下全会社の人事業務を担当する一員となりました。

会社社員の人事業務は、採用訓練等があり、私も訓練業務（教師の経験あり）に興味があり、生産性本部や企業訓練のプログラムに多く参加し、TWI（Training Within Industry）・産業訓練の講師を務め、そして講師を養成する高級講師の資格も取りました。郵便局や大手会社（日産の台湾の提携会社、裕隆自動車）でも講師を務めました。会社を代表して炭鋳業界や労働組合の会合に参加することもありました。夜は大学卒の同僚とよく講演会や、大学の夜間部の講義を傍聴することもありました。

1967年、私は夜間大学の受験をパスして、第一志望で文化学院（現・中国文化大学）新聞学科に入学しました。夜間大学は5年制でした。1972年に卒業、その年、文化大学大学院で日本研究所修士課程の入学試験があり、私は新聞学科の成績と日本語文の背景のお蔭で見事入学しました。1974年6月大学院修士課程を終え、修士号を授けられました。

大学、大学院の授業は私が台陽鋳業の社員をしていたので、全て夜間と仕事の合間を利

用していたのです。昼間は勤務、夜は学業とあって、7年間苦勞しました。博士コースへも考えましたが、当時は台湾（中華民国）の政局が益々安定を失い、国連から追放され（1971年10月）、日本とも断交（1972年9月、日中国交正常化）、蒋介石総統は何時死ぬのか、独裁政治はどうなるのか。重大な局面を迎える中で、1970年7月1日から朝日新聞社の委託で通信員を務めることになり、台湾の政治、社会、経済の変化に注目しなければならないので博士号の追求は断念しました。1967年の大学入学前まで、新聞社の国際記事をかなり注目し読むことが出来ました。台陽鋁業の^{イェン}顏社長は一般の人が日本の新聞を購読出来ない中で、特別の許可で朝日新聞と日本経済新聞を定期購読していました。私は社長の読んだ新聞を貰って国際情勢の理解に努めていたのです。小学校時代から戦争中の時局の変化に注目して、私は毎日、新聞を読んで時局を知る習性がついていました。この台陽鋁業での朝日、日経が読めたのは大変な幸運でした。

夜間大学の新聞学科を志望したのも興味があったからです。私が大学に入学した時は既に35才、クラスの中では3番目の‘年寄り’でした。もう二人は米軍顧問団の新聞連絡官（中・英通訳官）のベテランと国民党産業部の幹部だった有能な人物、この二人が1年、2年の班長（級長）、私が年の順で3年生の班長を務めました。私は日本語文の専門知識を利用して、学校発行の校内新聞（新聞学科の実習紙）「文化一周」で日本のマスコミ（新聞、放送、広告業等）を連載記事で書きました。その取材活動で、1970年3月頃（大学3年生時）、朝日新聞台北支局（アジア総局、東南アジア特派員の台北事務所）の伊藤齊記者と初めて会い、約2時間に亘って、時局、マスコミ等について話し合うことになり、伊藤記者からいろいろな資料を得ました。

丁度その頃、朝日新聞社の広岡知男社長が自民党の国会議員、松村謙三を団長とする「訪中大使節団」に同行して中国を訪問、4月19日、広岡社長は使節団の一行と共に中国首相・周恩来氏と会見していました。広岡社長と周首相の異例の会見によって、朝日は「日中国交正常化」の推進役を担いますが、北京と台北両方に朝日の記者が駐在していることは良くない、と指摘されて、急遽台湾から記者を引き上げることになりました。そこで伊藤記者は東京に戻る際、「ニュースのある所には朝日の記者は必ずいる」といって、私に台北支局の取材活動を依頼してきたのです。それから30年間、私は朝日新聞社の台湾での「囑託」、「顧問」、「連絡員」、「通信員」となり、朝日の台湾報道に協力しました。

文化大学新聞学科の在校中、昼間は台陽鋁業と台湾鋁山労働組合委員長両方の仕事があり、夜は学校で勉強するなど、よく頑張りました。又、時々、台湾の新聞社（経済日報、台湾新生報の国際関連記者の翻訳編集、中央通信社の対日、日本文原稿）でも夜間の仕事をやっていました。この新聞社での仕事（日本文翻訳編集）は朝日と後の台湾の大手新聞、自由時報での仕事にも役に立ちました。（中略）文化大学新聞学科の勉強は、少なからず、マスコミ界での動きや大学院の入学に役立ちました。

1972年秋の大学院入試では、全校約50名の修士コースの7位でした。日本研究所は、4人が文学コースで、私、唯一人が日本の国際関係論でした。入学試験に際して、私は入学試験官の口語試問で、日本語を使って堂々と語り合ったのでした。試験官は元駐日大使で優秀な外交官〔^{チェンジンディン}沈 觀 鼎〕でした。退官して文化大学の日本研究所所長に就かれて、日本語

文の分る優秀な日本研究者の養成を目指していました。ところが、台湾での大学日本語養成は政治を避け、文学が重んじられていたので、日本の政治や、国際関係を志望する希望者は少なかったのです。入学試験の主要設問は、以下のようなものでした。

①日本政府の対中（台）政策等、②日本のマスコミの対中（台）態度
私の得意の分野であり、朝日新聞の仕事をしていたことも幸いでした。

1971年10月に国連での中国代表権問題が解決し、中華人民共和国政府が中国唯一の合法政府と見なされ（それまで、1949年10月1日から中華民国〔台湾〕は北京の抗議にもかかわらず、国連での中国議席〔代表権〕を維持して来ましたが）、台湾の蒋介石代表は追放されました。1972年2月、アメリカのニクソン大統領が中国を訪問、中華人民共和国承認するための重要な一歩となりました。この時代背景の中で文化大学日本研究所は、当時の日本の国際関係理解者を重要視したのでしょうか。たまたま、私は運が良かったのでしょうか。試験官との会話でも直接日本語で、周恩来、中国の事情、台湾の事情、日本のマスコミ、日本政府の対中政策等を討論して優秀な成績をとれたのでした。

修士論文は、松下電器の福祉制度を述べ、紹介しました。当時、私は台湾の鉱山労働組合の委員長と台湾総工会の常務理事でもありましたので、松下電器創立者、松下幸之助の経営理念や松下労働組合の活動を中心に、大阪府門真市にある松下電器の本社や組合本部に直接〔出向き〕、労働福祉について研究し、論文を完成したのでした。

1974年6月、文化大学日本研究所（大学院）の課程を修了し、修士号を授与されました。

卒業に当たって、文化大学総長（元・教育部長＝文部大臣）は私を呼んで、学校に留って講師と行政役を担当するよう求めましたが、私は朝日新聞との契約もあり、又、国民党の高級幹部でもあり蒋介石総統のブレーンでもある総長の理念には賛成出来ず、拒否しました。総長との会見の途中、別の来客が来まして、総長が席を中断して応対に当たったすきに、私も席をけって帰ってしまいました。今考えると本当に失礼なことをしてしまいました。無礼千萬！国民党には反感を持っていたので、文化大学に協力することは出来ませんでした。

註

- 1) 台湾オーラルヒストリー研究会編集「オーラルヒストリー集8 駱文森オーラルヒストリー」『台湾口述歴史研究 第16集』、2015年3月
- 2) 手稿は、当初駱氏の自伝をまとめる計画で始まった駱文森氏とご友人の河井継美氏の間で交わされた往復書簡（2012年夏～2013年ごろ。およそ40回。具体的な日付・回数の記録なし）である。健康状態の悪化などで計画は中止、手稿は未完成・未発表。
- 3) この手記が書きはじめられた2012年夏。